慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	太田先生との最後の出会い
Sub Title	
Author	久保, 文明(Kubo, Fumiaki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.4 (2009. 4) ,p.196- 198
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事 : 太田俊太郎先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20090428-0196

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

太田先生との最後の出会い

太田俊太郎先生が昨年逝去された。深く哀悼の意を表したい。

先生は長らく病に伏していらした。最後にお会いしたのがいつであったか、しかと思い出せない。一九九四年に慶應義塾大学を選択定年制により退職された後、北陸大学に移られたが、引き続き慶應義塾で教鞭をとられたほか、京都でも非常勤講師をされ、大変お元気で、同時にお忙しそうな様子であった。アメリカ政治の研究会などではしばしばお会いした。

その後しばらくして、ご体調を崩されたために北陸大学を退職され、療養生活に入られた。その後は、研究会にも出席されなくなり、お会いする機会を逸した。おそらく、その頃から公の場には一切ご出席されなくなったのではないかと想像している。お電話では時々お話しすることができた。お声はお元気な頃とまったく変わりがなかった。お会いしたい、お見舞いに伺いたいと何回もお願いした。しかし、いつも先生は丁寧に、しかしとてもはっきりと、お断りされた。まことに残念であった。

それは先生なりの生き方なのであろうとも思った。しかし、このままでは結局お会いする機会をついぞ得られないのではないかと結論せざるを得ず、焦慮に駆られるとともに、無性に悲しくなった。

ところで、私の指導教授であった齋藤眞先生は二〇〇七年の二月に倒れられ、闘病生活に入られた。いくつかの病院で治療を受けられた後、読売ランド近くにある慶友病院に入院された。その年の夏、太田先生の奥様と電話でお話ししている際に、太田先生も同じ病院にいらっしゃることがわかり、その偶然にとても驚いた。

一一月の終わり頃、齋藤先生のお見舞いに伺うことになった。そこで、思い切ってお願いしてみた。同じ病院に伺いながら、太田先生にご挨拶せずにただ帰るのは、あまりに理不尽に思えた。ほんの数分でもご挨拶させていただけないであろうか。

初めてご許可をいただいた。そして病院に伺った。ようやくかなった面会であった。

ある程度予想はしていたが、想像以上に痩せられていて、正直とても驚いた。弱られていることは一見明白で

あった。お声もたいそう弱々しかった。おいたわしい限りであった。

ただ、おそらく四〇分から五〇分くらいであったろうか。先生はよくお話しになられた。声はときに聞き取りにくいほど小さかったが、ときにユーモアを交えながら、そして笑みを浮かべながら、まったくお元気な頃と変わらず、穏やかな口調でお話をされた。私を筑波大学から慶應義塾大学に迎えてくれたことについても触れられた。

太田先生が私を慶應義塾大学に呼んで下さった。アメリカ政治研究会という月例の研究者仲間の勉強会の司会役が太田先生であり、私が連絡役であった。会の創設者は齋藤眞先生であった。たまたま研究会のご相談でお電話したところ、太田先生はいきなり、しかしいつものように大変遠慮がちに、「久保さん、私立大学に移ってもよいなどというお考えはお持ちでしょうか」と、話を切り出された。それまでの慶應のイメージは、失礼ながら、塾出身者しか採用しないというものであったため、まさに青天の霹靂であった。

決断するのに時間はかからなかった。お世話になってみると、大変快適な職場であった。多くの尊敬できる同僚研究者にめぐり合うことができた。また、アメリカ政治研究の今後を担う後進を育てることもできた。一九九一年から二年間、ＡＣＬＳフェローシップと安倍フェローシップを得てジョンズホプキンズ大学で研究する機会をえることもできた。太田先生のおかげである。

実は、同様に感謝していることがもう一つある。

二〇〇一年夏の前であったと思う。東京大学法学部から移籍の話が来た。私のもう一人の指導教授である五十嵐武士先生が病を患われ、負担の軽い講座に移って、「アメリカ政治外交史」講座の新任人事を行った。その結果、私に移って来るようにとのことであった。慶應義塾での研究環境は快適であったし、一緒に法学部を少しでもよくしようと努力してきた先輩・同僚、あるいは後輩の教員との関係でも随分悩んだ。最初はお断りしようと思った。しかし、徐々に行政面の負担が増えつつあった慶應での生活が、当時ややきつくなってきたことも確かであった。授業負担が少なく、心機一転研究に集中できそうな新しい職場も、本来研究者を目指した人生である以上、魅力的に見えた。ただ、最終的に決断するにあたって、もっとも心にひっかかったのが、私を慶應義塾

に招き入れてくれた太田先生に対する後ろめたさであった。

それなりに重大な事柄であると判断したので、当然ながら直接お会いしてご相談させていただくつもりでいた。しかし、先生はやはり面会を固辞され、いまこの電話で話すように促された。そしてすべてをお話しした。まことに気の重い一瞬であった。

ところが、太田先生は「それはおめでとう。ぜひお移りなさい。そのような時がくれば、そう言うつもりでした」と間髪をいれずに応答された。そのお優しい言葉に、文字通り涙ぐんだ。

私には太田先生の「弟子」と自称する資格はない。にもかかわらず、先生は何回か人生の重要な転機を提供してくださり、またおそらく通常の指導教授以上に終始一貫暖かく私の研究活動を見守って下さった。ご恩に報いることができたかどうかは、まことに心もとない限りである。ただ、私がいくら感謝してもし尽くすことができないと感じていることは確かである。

太田先生。大変お世話になりました。心よりご冥福をお祈りいたします。今後とも暖かく見守っていただけますよう、勝手ながらお願い申し上げます。

二〇〇九年二月二六日

東京大学教授　久保文明